

## 保胤『池亭記』の隠棲思想

### THE PHILOSOPHY OF SECLUSION IN YASUTANE'S *CHITEI-KI*

劉 魯 平\*

It is generally accepted that Chinese culture and philosophy have made a big impact on the ruling class society in the Heian period of Japan. The Japanese government officials who thought along Chinese traditional ways went into seclusion in Heian Japan. But the bureaucratic nobility of the Heian period, such as the Taneyasu, assimilated these ideas into Japanese culture and made them a reality in practice. It was not a carbon copy of the original, although the Japanese adopted the Chinese tradition of living in seclusion there were many differences below the surface. In fact it has become an altogether concept.

This paper examines Yasutane's "Chitei-ki", an elaborate reworking of Hakkyoi's "Chijou-hen". In particular, I shall look at how the two authors' interpretations of *Insei* (the secluded life).

---

\*LIU Luping 中国西安外国語大学日本文学学科卒業。弘前大学人文科学研究科修士課程修了。現在新潟大学現代社会文化研究科博士課程在学中。研究分野は比較社会文化論（平安朝文芸作品における漢詩文の影響）。主な論文に「民族主義的相対化在中国近現代研究中的意義」（翻訳）（『中国研究月刊』1995. 1 卷第3号）、「浅談“中国威脅”論」（『「邁向新世紀的中国」研討會論文集』1996. 7）がある。

Finally, in addition to summarizing the personal careers of Yasutane and Hakkyoi, I would like to examine the cultural environments they inhabited, and thereby hope to discover the causes of their differing attitudes to *Insei*.

## はじめに

平安時代中期に生きた賀茂保胤が、白居易の『池上篇』を踏まえて、『池亭記』を著したことはすでに周知の事実です。それならば、『池亭記』に表現されている、そのテーマともいうべき隠棲思想は、白居易の隠遁思想と比べて、どのような特色をもっているのでしょうか。白居易をどのように受容したか、という問題については、すでに金子彦二郎氏の『平安時代文学と白氏文集－句題和歌・千載佳句研究篇』をはじめ、数多くの研究論文が書かれています。それらを概観すると、おおよその傾向として、賀茂保胤は白居易の隠棲思想をほぼ忠実に継承したとする見方、あるいは、両者の相違をはっきりさせなかったという点で共通しているように思われます。はたして、このような通説は正しいのでしょうか。もう一度原点にもどって、新しい目で比較研究を試みる必要があると思います。

本発表では、『池亭記』のなかから、隠棲思想がとくに強く表現されている部分を取りあげ、それを『池上篇』と比較・分析することによって、賀茂保胤の隠棲思想がいかなるものであったのかをあきらかにしたいと思います。保胤の隠棲思想のあり方を具体的にあきらかにすることによって、保胤が貴族官人として「身」と「心」との矛盾をどう解決しようとしていたかが解明されます。そしてそこにこそ、白居易の『池上篇』と保胤の『池亭記』との決定的な相違と、保胤の隠棲思想の独自性が横たわっているように思います。

## 一 平安朝文人における中国隠棲思想の受容

古来、中国において「隠遁」「遁世」あるいは「隠居」とは、政治社会と対立し、現実社会から逃避しようとする行為を示しています。資料1（末尾参照）

の下線部をご覧ください。たとえば、孔子は

不入危邦、不居乱邦、天下有道則見、無道則隱。

と述べています。孔子は、天下（政治社会）が秩序立っていて、その政治理念が自分の考える所と一致しているならば出仕すべきだが、そうでなければ隠遁すべきだ、と考えていたのです。また資料2（末尾参照）をご覧ください。「不事王侯、高尚其事」「或隱居以求其志」とあるように、己（儒士として）の志を追求するために、王侯に仕えることを拒否する態度をとるのであって、時には隠棲するのです。

以上を総合してみますと、中国において隠遁と出仕とは、対立することだったのです。資料3（末尾参照）をご覧ください。漢の劉安の「招隱士」のなかに書かれているように、中国では、さわがしい都から遠く離れて山奥に隠れ、自然につつまれて棲むことが隠棲であったのです。晋の「竹林七賢」は、中国で「竹林諸賢」「竹林名士」とも呼ばれています。しかし、「隠士」－隠棲している名士としては認められていませんでした。それは、礼教に対し反抗的な態度をしめした彼らであるのに、山中に隠棲せず都にとどまり、政治社会から遠ざかることをしなかったために、ほとんど「隠士」としてみとめられなかったのです。

くどくなりますが、資料4（末尾参照）をご覧ください。平安朝の文人たちは、中国古来の隠遁生活に憧れの意を示しながら、同時に、隠遁者でないはずの竹林七賢を理想の「隠士」－隠棲者と捉えています。具体的に見てみましょう。資料5（末尾参照）をごらんください。「七子超然混同ならず、何台閑勲功を録するに要る」とあり、保胤も例外なく『池亭記』<sup>①</sup>の中で「晋朝七賢為異代之友、以身在朝志在隱也」と讃えているのです。平安朝の文人たちや保胤はどうして竹林の七賢を理想の「隠士」として捉えたのでしょうか。

すこし脇道にそれて説明してみますが資料6（末尾参照）をご覧ください。「居を山水にうらない、心機をやすめ、人間に是非をばくすることをいさぎよしとせず」と隠棲思想が表現されています。その隠棲思想は、家永三郎氏が指

摘しているように、「漢籍によって伝えられた文字上の知識に由来」<sup>②</sup>していたり、現実社会の矛盾・煩悶から脱出したい強烈な要望、いわゆる「山里への志向」<sup>③</sup>によるものとも考えられます。

よく『池亭記』と比較される鴨長明の『方丈記』においても、山里への志向－隠棲思想があらわれています。参考資料に挙げていますが、『方丈記』の冒頭に記しているように、『方丈記』の隠棲思想は現実世界を否定したうえに成り立っています。資料7（末尾参照）をご覧ください。「登臨俗にほかならず、吏隠とも相かねる」といっている平安朝文人また保胤の、精神上の隠棲とはまったく異質なものと言えるでしょう。

くりかえしますと、『池上篇』が隠遁思想を表現しているならば、『池上篇』を踏まえて書いている保胤の『池亭記』は、隠遁思想をのべているのでしょうか、それとも隠士思想を述べているのでしょうか。次に、両者を比較しながら共通・類似点と対立・相違点を明らかにしてみたいと思います。

## 二 『池上篇』『池亭記』による隠棲思想の比較

資料8をご覧ください。両者にたくさんの共通・類似点、対立・相違点がありますが、特に大切なものについて三点に分けて表にしてみました。この表にしたがって説明していきます。

まず、1のaをご覧ください。『池上篇』は白居易の晩年に近い頃の作品です。彼は文章のはじめに池を囲む邸宅を「退老之地」つまり老後を過ごす場所と記しています。それに対して、保胤は中国古代の有能な実力官吏に見習い、「上挾簫相国窮僻之地、下慕仲長統清曠之居」とのべ、官人としての「池亭」を建てるのだと明言しています。このように、邸宅を営む目的が白居易と保胤は始めからそもそも異なっているのです。

2のaをご覧ください。作者それぞれの目的によって、白居易には「琴亭」、保胤には「弥陀堂」が建てられています。白居易は琴書酒に囲まれた生活を楽しむことによって、政治社会を忘却しようとしているのに対して、保胤は仏教



資料 8

1. どのような目的で亭に住むか『池亭記』	『池上篇』
<p>対立・相違点</p> <p>a 上圻簾相国窮僻之地、下慕仲長統 ← a 即白氏搜退老之地。 清曠之居。</p> <p>b 其家自富、其主自寿。官位永保、 ← b 吾将終老乎其間。 子孫相承。</p> <p>共通・類似点 (なし)</p>	
2. 建物の配置・様子『池亭記』	『池上篇』
<p>対立・相違点</p> <p>a 池西置小堂安弥陀…池北起低屋着 ← a なし 妻子。</p> <p>b なし ← b 又曰、雖有賓朋、無琴酒不能娛也、乃 作池西琴亭。</p> <p>共通・類似点</p> <p>a 地方都廬十有余畝。就隆為小山、 ← a 又曰、雖有子弟、無書不能訓也、乃作 遇窪穿小池…池東開小閣納書籍。池北書庫加石樽焉。</p> <p>b 凡屋舍十之四、池水九之三、菜園 ← b 地方十七畝、屋室三之一、水五之一、 八之二、芹田七之一。竹九之一、而鳥樹橋道間之。</p>	
3. 生活の様子『池亭記』	『池上篇』
<p>対立・相違点</p> <p>a 其外緑松島。白沙汀、紅鯉白鷺、 ← a 有堂有亭、有橋有船、有書有酒、有歌 小橋小船、平生所好、尽在於中。有絃。有甓在中、白鬚飄然、識分知足、 外無求焉…靈鶴怪石、紫菱白蓮、皆吾所 好、尽在我前。</p> <p>b 盥漱之初、參西堂、念弥陀、誦法 ← b 每至池春風、池秋月、水香蓮開之旦、 華。飯食之後入東閣、開書卷、逢露清鶴淚之夕、拂楊石、拳陳酒、援催琴、 古賢。…予杜門閉戸、独吟独詠。彈姜《秋思》、頽然自適、不知其他。</p> <p>若有余興者、与兒童乘小船、叩絃鼓棹。若有余暇者、呼童僕入後園、以糞以灌。吾愛吾宅、不知其他。</p> <p>共通・類似点 (なし)</p>	
その心情『池亭記』	『池上篇』
<p>対立・相違点</p> <p>a 家主、身雖在柱下、心如住山中。 ← a 時引一盃、或吟一篇。妻孥熙熙、鷄犬 不樂人之為風鵬、不樂人之為霧豹、閑閑。優哉遊哉。 不要屈膝折腰、而求媚於王侯將相、 又不要避言避色、而刊徙於深山幽 谷。在朝身暫隨王事、在家心永埽 仏那。</p> <p>共通・類似点</p> <p>a 予行年漸垂五旬、適有小宅。蝸安 ← a 如鳥扞木、姑務巢安、如竈居坎、不知 其舍、虱樂其縫。鳥住小枝、不望海寬。 鄧林之大、蛙在曲井、不知滄海之 寬。</p>	

的な生活を営んでいくことを目的としているところに特色が顕れていると思います。

3「生活の様子」の『池上篇』の下線部をご覧ください。白居易は『池上篇』の中で、「頽然自適、不知其他」と述べています。白居易の琴酒でもって自適するという風流の生活を楽しむ姿がみられます。しかし、白居易にとって、政治社会こそ自分自身の社会的価値を確かめる場所であり、儒生つまり儒教精神を持った官人としての「兼済」の抱負を実現させる唯一の場でした。これは、白居易だけの傾向ではありません。政治上の出世を一生の目標とするのは、儒教本位である中国の一般知識人の生き方だと言えるでしょう。政治の中心から除外された白居易は、儒生としての居場所がなくなり、やがて〈池上〉の中で「独善」の道を歩み始めました。

同じ資料の左の部分をご覧ください。保胤は、「盥漱之初、参西堂、念弥陀、読法華」と「池亭」での閑的な生活ぶりを具体的に述べています。つまり彼は「池亭」を出れば、政治社会において自己の価値を認めてもらえるように、官人として真面目に「王事」－「公」に仕えることに心をつくしている一方、公事を終え「池亭」に戻ると、「仏那」に精神の安らぎと「私」だけの空間を求めているのです。こうして、保胤は「池亭」を外の世界と一線を画し、仏教に基づく独自の精神生活を確保しました。

大切なことなので、わずらわしいのですが、もう一度くりかえすことにします。3の「その心情」の部分をご覧ください。保胤は「身雖在柱下、心如住山中」「在朝身暫随王事、在家心永帰仏那」と言っています。ここからは白居易の俗世を超越しようとしている〈池上生活〉とは正反対に、保胤の〈池亭生活〉は「身」と「心」とが分かれていると言えます。しかし、その「身」と「心」とは、いままで言われてきた対立関係ではなく、相関関係だと思います。なぜならば、保胤は毎日、身を持って「王事」に奉仕する昼の生活と、「仏那」に随い己の心を取り戻す夕方の生活を繰り返しています。言い換えれば、保胤は「池亭」のなかで現実に居る「身」と隠棲している「心」を矛盾なく調和させ

ているのです。

そして、『池亭記』を記した翌年から、保胤は政治改革に加わり官人として大いに活躍しました。<sup>④</sup> 3のaにある下線部をご覧ください。それは二年足らずの短い期間でしたが、保胤の「不要避言避色、而刊従於深山幽谷」という積極的な仕官の志が存分に発揮されたと思われます。

くどくなりますが、右の『池上篇』をご覧ください。保胤の政治社会を肯定する考えに対して、白居易は「池上」での生活が我を忘れるほど楽しいものであると繰り返して強調しているところに、現実社会を拒否しようとする姿勢が窺えるでしょう。また、資料9（末尾参照）をご覧ください。白居易が考案した中庸を得た生き方「中隠」－〈池上隠棲〉の理想は、政治闘争から離れ、安逸な現実生活を願う程度にとどまらざるを得なかったのです。白居易が「人生処一世、其道難兩全」と嘆いているように、中国の官僚文人が現実世界の中で選ぶことのできる生き方は二つに限られています。それは陶淵明のように、きっぱりと政治社会での出世を断念して、完全に隠棲生活に没入する道、あるいは、范仲淹が「岳陽樓記」の中で述べたような、個人の進退出処を念頭におかず、儒生としての政治理念を貫いていく道です（資料10（末尾参照）の下線部をご覧ください）。

資料8にある保胤のような、現実世界に立脚した処世態度で生き、仕官と隠棲を兼ねた生活は、古来中国の官僚文人たちが憧れていた生き方です。その意味でおおげさではありますが、保胤は白居易が提唱した「中隠」または「吏隠」の理念を実践にうつしたと言えるでしょう。

以上のことを総合していえるのは、保胤はたしかに『池上篇』の文体構造や叙述風格を踏襲して『池亭記』を記しました。しかし、『池亭記』に流れているのは隠遁思想ではなくて、隠士思想というべきです。また、保胤の〈池亭隠棲〉は、現実生活を成す一部分であるところに、その独自性が横たわっているようにみえます。

### 三 保胤の〈池亭隠棲〉について

『池亭記』の題名は、作者が尊敬していた白居易の『池上篇』、兼明親王の『池亭記』を意識してつけたことは言うまでもありません。そこで、保胤の住居である〈池亭〉は、彼の隠棲思想の形成にどんな役割を果たしたかを考察してみましよう。

森蘊氏が指摘しているように、平安時代の庭園の大きな特徴の一つは、建物の前面に池を設け、その周辺に象徴的に凝縮された自然景観を配置することです<sup>⑤</sup>。資料11（末尾参照）をご覧ください。その景観を觀賞する背後に、儒教の「知者楽水、仁者乐山」という自然観の投影が窺えます。

平安時代の庭園は、なによりも蓬萊三島、瀛州仙境、西王母の瑤池に擬して盛んにつくられ、中国から伝来した神仙思想を色濃く反映しているところに、大きな特色があると思われます。貴族文人は、こうした俗世界から遮断された擬似「神仙境」にいることによって、精神が清められ自由な境地に達することが可能になったのでしょう。

またそれは、平安貴族個人の私生活に限らず、公的行事にも投影しています。当時、「晴」の行事として盛んに行われていた宮中歌合の際に、神仙境を連想させる「洲浜」が、歌合の会場である庭園の中に設置されていました。歌人たちは、目の前にある洲浜や周囲の庭園の景色を見ながら想像を走らせ、歌を競い合っていたのです<sup>⑥</sup>。そこで庭園や洲浜は、「君臣和楽」の世界を装飾する背景ではなくなり、人間と神または人間と自然との融合を実現させた担い手・媒介になったのです。その意味で、庭園は、貴族文人の超現実的・観念的な美世界の形成に、なくてはならぬ存在だったと思われます。

保胤もまた、このような大自然を凝集した「池亭」に、精神上の安らぎを求めたのです。浄土信仰をもっていた彼はさらに当時の風潮に応じて、池亭の西方に弥陀堂を建て、死後の極楽往生を願っていたのです。資料12（末尾参照）の下線部をご覧ください。このように保胤は、儒・道・仏思想を包容した「池亭」

を有することによって、家永三郎氏が指摘しているように、「山里に奔るまでもなく、都の内に住み簪纓の絆に終身纏はれながら猶ある種の救済に達すること」<sup>⑦</sup>ができました。

つまり、平安中期に、日本では、官人としての現実生活と隠土的な精神生活とを調和させて生きるという、極めて戦略的な知的生活の方法が確立したのです。以上述べたことは、そののちの日本文化史を捉えるとき、重要な新しい視点と発見を我々にもたらしてくれると思います。

### 結 わ り に

古来、中国から伝わってきた隠遁思想が、平安時代さらにその後の時代の文化思想に計り知れぬ影響を及ぼしたことについては、優れた先行研究があるので、繰り返すには及びません。しかし、中国の政治制度・文化風土に根ざしている中国隠遁思想、とりわけ魏晋南北朝時代の隠遁思想は平安朝文人に受容されたと同時に日本的に変質してしまいました。賀茂保胤はまさに、中国文化が日本社会に土着しようとした時代に生きていた、代表的な貴族文人でした。

保胤は「池亭」での隠棲を、自分を現実から隔絶する手段としてではなく、現実社会へ溶け込むのに必須な精神支柱としてつくりあげたというべきです。とくに、彼の隠棲は、政治社会とは対立することがなく、相関関係であるところに特色があらわれています。したがって、保胤の隠棲思想は、現実否定を前提とする白居易あるいは中国の隠遁思想とは、相通じる点があるものの、隠棲と現実との矛盾をいかに処理するかという重要なところに、大きな相違をみせたのです。

また、保胤の『池亭記』は、『方丈記』をはじめ後代の草庵文学に強い影響を与えました。その隠棲思想は後世の人々に大きな影響を及ぼしたと考えるべきです。さらに、注目すべきなのは、中世における村田珠光・武野紹鷗らが確立した茶の湯の精神、その反映としての茶室の思想の原点・出発点となっていると考えられることです。俗世である都の中に、隠者となって茶室で一時を過

ごすというのが茶の湯ですが、茶人たちは、茶室に入り世俗をわすれ、茶室を出て世俗に戻るのです。これはとりもおさず、以上述べてきた平安中期の賀茂保胤の『池亭記』の思想ではないでしょうか。少なくとも、中世の茶室の隠棲思想につながるものと考えてよいでしょう。

保胤のこのような隠棲思想を促したのは、その頃しだいに明確になってきた日本固有の考え方であり、日本固有の文化的成熟でありました。保胤は、それを基盤に中国の隠遁思想を深く受け入れ、そして日本独自の隠棲思想を確立しました。すなわち、中国の隠遁思想が隠士思想へと屈折するところに、日本独自の隠棲思想の形成が見て取れます。

これまで、白居易の『池上篇』も保胤の『池亭記』も隠遁思想を述べた書として同じように扱われてきましたが、両者には大きな違いが存在することに注意しなければならないと思います。

#### 資料1 (中国における隠遁の基本的な意味)

子曰、篤信好學、守死善道、不入危邦、不居乱邦、天下有道則見無道則隱、邦有道、貧且賤焉、恥也、邦無道、富且貴焉、恥也。  
(「泰伯篇」『論語』)

#### 資料2 (中国における「隠遁者」のあり方)

易曰遯之時義大矣哉又曰不事王侯高尚其事是以克称則天不屈類陽之高武尽美矣終全孤竹之潔自滋以降風流彌繁長往之軌未殊而感致之数匪或隱居以求其志或曲避以全其道或靜己以鎮其燥或去危以図其安或垢俗以動其桀或疵物以激其清。  
(「逸民列傳」唐章懷太子注「後漢書」)

#### 資料3 (中国古来の隠遁生活)

桂樹叢生兮山之幽、偃賽連蜷兮枝相繚、山氣籠從兮石嵯峨、谿谷嶄巖兮水曾波、猿狖群嘯虎豹嘯、樛援桂枝兮聊淹留、王孫遊兮不歸、春草生兮萋萋、(略)虎豹鬬兮熊羆咆、禽獸駭兮亡其曹、王孫兮歸來、山中不可以久留。  
(劉安「招隱士」『文選』卷三十三)

#### 資料4 (中国古来の隠遁生活を理想としている漢詩文)

- ①陶潛不狎世。州里倦塵埃。始覺幽栖好。長歌婦去來。琴中唯得趣。物外已忘懷。柳掩先生宅。花薰處士杯。遙尋南岳徑。高嘯北窓隈。差爾千年後。遺聲一美哉。 (板上忌今「詠史」『凌雲集』)
- ②(略)徒親夫一人慎日、四方觀雲。鶴書頻飛、難全霜竹之潔。鳳詔屢聘、誰動風桂之文。訪而無遺、二華觸石之膚愛逮。求而必致、五葉浸浪之痕氤氳。厚札蒲輪、賜詔金馬。屈晉文於介山、感殷氏於傳野。建漢封而無事、覆寶鼎於汾陰之中。 (江以言「視雲知隱賦」『本朝文粹』)
- ③門前秋水後秋山、尽日瀟瀟眺望閑。人不到、路難攀。唯看随例暮雲還。  
(紀納言「山家秋歌」『本朝文粹』)
- ④独居窮巷側、知己在幽山。得意千年桂、同香四季蘭。野人披薜蘿、朝隱忘衣冠。制思何処所、遠在白雲端。  
(淡海三船「贈南山智上人」『本朝一人一首』)

資料5 (竹林七賢を隱者と捉える平安朝漢詩文)

晋朝澆季少浮風、七子超然不混同、欲对琴樽終性命、何要台閣録勲功。

(「題竹林七賢圖」〔田氏家集〕)

資料6 (山里志向が顕れている漢詩文)

卜居山水息心機、不屑人間駁是非。扃澗戸、掩松扉。秋寒只納薜蘿衣。

(紀納言「山家秋歌」〔本朝文粹〕卷一)

資料7 (平安朝貴族の隱棲(吏隱)思想が顕れている詩文)

聞有幽栖地。捫羅試一瞻。白雲杯下起。黃菊掌中粘。野近獸馴座。林隣鳥望檐。登臨不外俗。吏隱兩相兼。

(桑原腹赤「秋日於友丈人山莊興飲」〔凌雲集〕)

資料9 (白居易の隱居思想が表現されている詩文)

大隱住朝市。小隱入丘樊。丘樊太冷落。朝市太囂喧。不如作中隱。隱在留司官。似出又似處。非忙亦非閑。不勞心与力。又免飢与寒。終歲無公事。隨月有俸錢。(略) 人生處一世、其道難兩全。賤即苦凍餒、貴則多憂患。唯此中隱士、致身吉且安。窮屈与豐約、正在四者間。

(「中隱」〔白氏文集〕卷二十二)

資料10 (中国官僚文人の生き方が顕れている章節)

慶曆四年春、藤子京謫守巴陵郡。(略) 予常求夫古仁人心、或異之者為何哉。不以物喜不以己悲、居廟堂之高則憂其民、処江湖之遠則憂其君。是進已優退已優然則何時而樂耳。其對曰、先天下之憂而憂後天下之樂而樂、歟意然者斯人塾与婦。

(范仲淹「岳陽樓記」)

資料11 (中国の「山水」思想)

子曰、知者樂水、仁者樂山、知者動、仁者靜、知者樂、仁者寿。

(「雍也篇」〔論語〕)

資料12

この様にして創造せられた超自然的自然の世界によって、新古今の歌人たちは弥陀の悲願にもよらず、亦山里に奔るまでもなく、都の内に住み簪纓の絆に終身縛はれながら猶ある種の救済に達することが出来たのである。それは極めて特殊な形に於てではあるが、兎も角も自然が人間の魂を救ふ宗教的なはたらきを果した一の例証たるに相違はないとしなければならぬ。

(家永三郎「日本思想史に於ける宗教的自然観の展開」より)

注

- ①テキストは大曾根章介校注「本朝文粹」(新日本古典文学大系、一九九二年五月)に依る
- ②家永三郎「日本思想史に於ける宗教的自然観の展開」(「日本思想史に於ける否定の理論の発達」138頁)昭和四十四年九月
- ③家永三郎②同論(133頁)
- ④増田繁夫「慶滋保胤伝攷」(「国語国文」)昭和三十九年六月
- ⑤森蘊「『作庭記』の世界」(NHKブックス)昭和六十一年三月
- ⑥錦仁「院政期歌合の構造と方法－〈藝〉から〈晴〉への和歌史観の批判－」(「日本文学」)平成六年二月
- ⑦家永三郎②同論(167頁)

参考文献

錦仁「源経信の漢詩文的表現－〈晴〉と〈藝〉のことなど－」(「平安後期の和歌」)平成六年五月  
増田繁夫④同論

片桐洋一校注『後撰和歌集』（新日本古典文学大系）一九九三年十二月  
久保田淳（ほか）校注『後拾遺和歌集』（新日本古典文学大系）一九九四年四月  
片野達郎（ほか）校注『千載和歌集』（新日本古典文学大系）一九九五年二月  
有吉保『王朝の歌人・西行』一九八五年二月  
伝冷泉為相筆本「山家心中集」（久保田淳編『西行全集』）一九八三年六月  
「山家集」下雑（久保田淳<sup>④</sup>同著）  
関口忠男「草庵文学の先駆・池亭記と方丈記」（『日本文学講座7』）一九五一年  
奥謝野寛（ほか）編纂『日本古典全集』大正十五年四月  
川口久雄『平安朝の漢文学』昭和五十六年十一月  
大曾根章介「『池亭記』論」（『日本漢文学史論考』）昭和四十九年十一月  
堤留吉「池上篇と池亭記」（早稲田大学国文学会編 国文学研究第十四輯）  
柳井滋「保胤と池亭記」（『国語と国文学』）昭和五十六年十二月  
小尾郊一『中国の隠遁思想』（中公新書）一九八八年十二月  
小島祐馬『古代中国研究』（東洋文庫）一九八八年十一月  
竹内実『中国の思想－伝統と現代－』（NHKブックス）昭和五十八年八月  
和漢比較文学会編『中古文学と漢文学』昭和六十一年十月

## 討議要旨

今西祐一郎氏から、中国の文人たちは政治的敗北が原因で隠遁生活に入るのに対して、日本の平安朝貴族が政治的敗北をした場合、出家というかたちをとることになるようだが、その違いは何かという質問があった。発表者からは、中国においては、出家は現実社会を脱出したいというところから成立する思想だが、これに対して隠遁は、まず隠遁者が官僚でなければならないという前提があり、現実社会に背を向けるのではなく、現実の政治に対する不満や自らの思想との不一致を不満として、一時的に政治社会から脱出するという思想である。したがって、政治社会と対立しながらも、現実の政治状況に常に感心を抱いているという点、隠遁は出家とは大きく異なっているという説明があった。

また、立川美彦氏から、鴨長明の『方丈記』との比較についての質問があり、『方丈記』は出家者としての、『池亭記』は官吏としての心情が述べられている点が異なるという回答があった。